

今
岡
古
墳

いま おか こ ふん
今 岡 古 墳

二〇二四年三月

高松市教育委員会・香川県教育委員会

2024年 3月

高松市教育委員会
香川県教育委員会

例 言

- 1 本書は、今岡古墳の規模・構造の把握を目的に平成29年度から令和元年度に実施した確認調査の報告書である。
- 2 調査地、調査期間及び調査面積は、次のとおりである。
調査地 高松市鬼無町佐料、佐藤
調査期間 平成30年3月12～19日、平成31年3月12～22日、令和2年3月9～25日
調査面積 56㎡
- 3 発掘調査及び整理作業は、高松市教育委員会、香川県教育委員会が実施した。調査及び整理に係る費用は、調査ごとで各機関が負担した。
- 4 現地調査及び整理作業は、高松市創造都市推進局文化財課 波多野篤、香川将慶（現文化芸術振興課）、香川県埋蔵文化財センター 蔵本晋司（現香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課）、竹内裕貴（現香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課）、真鍋貴匡、香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課 渡邊誠が担当した。
- 5 本報告書の執筆・編集は香川、波多野、真鍋、渡邊が行った。執筆に当たっては、既報告の記載をもとに全体の調査成果を踏まえて、加筆修正を行ったことを明記しておく。
- 6 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するに当たって、下記の方から御教示・御協力を得た。
今岡良三郎、今岡香代子、内海博文、四宮浩之、今岡重夫、大久保徹也、山本一伸、松田朝由、河内一浩、丸本啓貴、黛友明、養福寺、さめき市教育委員会、香川県立ミュージアム（順不同）
- 7 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。

凡 例

- 1 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第IV系（世界測地系）、方位は座標北を表す。
- 2 遺構・遺物の縮尺については図面ごとに示している。
- 3 土層及び土器観察表の色調表現は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。
- 4 遺物観察表の法量で、（ ）は推定値、[]は残存値を表す。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 経緯	1
第2節 経過	4
第2章 地理的・歴史的環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	7
第1節 調査の方法	7
第2節 調査の成果	7
第3節 出土遺物	13
第4節 小結	16
第4章 関連資料	19
第1節 今岡古墳関連採集資料（高松市教育委員会所蔵）について	19
第5章 まとめ	22

挿図・写真・表

図1 今岡古墳における埴輪などの分布状況	1	図11 調査に基づく墳丘断面図	17
図2 出土した土製棺、鏡、玉類	3	図12 墳丘断面図	17
図3 今岡古墳の位置	5	図13 今岡古墳関連採集資料①	20
図4 今岡古墳と高松平野西部の古墳分布	6	図14 今岡古墳関連採集資料②	21
図5 墳丘測量図及びトレンチ配置図	7	写真1 昭和39年調査時写真	2
図6 1・2トレンチ平・断面図	9	表1 トレンチ一覧	7
図7 3・4トレンチ平・断面図	10	表2 遺物観察表①	24
図8 5・6トレンチ平・断面図	12	表3 遺物観察表②	25
図9 出土埴輪①	14	表4 遺物観察表③	26
図10 出土埴輪②・出土土器	15		

写真図版

写真図版 01-1 1トレンチ調査前状況（西から）	写真図版 06-1 4トレンチ完掘状況（西から）
写真図版 01-2 1トレンチ土層及び円礫出土状況（南東から）	写真図版 06-2 3・4トレンチ完掘状況（南東から）
写真図版 01-3 1トレンチ完掘状況（東から）	写真図版 06-3 5トレンチ礫出土状況（西から）
写真図版 02-1 2トレンチ調査前状況（東から）	写真図版 07-1 5トレンチ完掘状況（西から）
写真図版 02-2 2トレンチ設置状況（北から）	写真図版 07-2 5トレンチ完掘状況（北東から）
写真図版 02-3 2トレンチ流土検出状況（北から）	写真図版 07-3 6トレンチ調査前状況（南東から）
写真図版 03-1 2トレンチ完掘状況（北から）	写真図版 08-1 6トレンチ完掘状況（南東から）
写真図版 03-2 2トレンチ完掘状況（北東から）	写真図版 08-2 6トレンチ中央平壇面検出状況（西から）
写真図版 03-3 2トレンチ礫検出状況（北から）	写真図版 08-3 6トレンチ盛土検出状況（西から）
写真図版 04-1 3トレンチ調査前状況（東から）	写真図版 09-1 6トレンチ推定盛土検出状況（南西から）
写真図版 04-2 3トレンチ土層（前部盛土）（南東から）	写真図版 09-2 6トレンチ埴輪出土状況（南西から）
写真図版 04-3 3トレンチ完掘状況（西から）	写真図版 09-3 調査出土埴輪①
写真図版 05-1 4トレンチ調査前状況（東から）	写真図版 10-1 調査出土埴輪②
写真図版 05-2 4トレンチ土層（前部盛土）（北西から）	
写真図版 05-3 4トレンチ埴輪出土状況（北から）	

第1章 調査の経緯と経過

第1節 経緯

今岡古墳の最初の調査は、上笠居尋常高等小学校の訓導教員から古墳の現地確認を依頼された福家惣衛氏によって実施され、大正11年の『史蹟名勝天然記念物調査報告』第1で立地、形状、規模、埴輪出土状況、葺石などについて報告されている(福家1921)。その後、昭和25年の『史蹟名勝天然記念物調査報告』第14において、同氏が昭和6年に出土した土製棺の小口部分の破片について報告を行っている(福家1950)。昭和27年刊行の『上笠居村史』でもこれらの報告が整理され、上笠居小学校(現鬼無小学校)所蔵の土製棺や多様な埴輪の写真に加え、福家惣衛氏が同行し、京都大学の梅原未治博士による現地確認や土製棺の調査が行われたことを示す写真も掲載されている(香川県香川郡上笠居村公民館1952)。昭和19年に刊行された『讃岐香川郡誌』に平面と断面の模式図を用いて、古墳の形状、規模が詳細に紹介されている(香川県教育会香川郡部会1944)。

このように、古くから円筒埴輪や家形埴輪等が供献された前方後円墳として知られ、前方部で土師質焼成の土製棺が出土するなどの点を受け、昭和32年4月20日付けで香川県史跡に指定された。指定理由は以下のとおりである。

「全長71m、後円部の高さ6.5m、前方部の封土4mに達するもので三段に造り出された前方後円墳である。その規模も大きく立地条件もすぐれており形状も明確である。特に珍しいのは墳麓に埴輪円筒を二段に配列し、前方部頂から陶棺、蓋、家形、柄、盾、短甲等の埴輪が出土していることで、こうした珍奇多量の副葬品を埋藏していた古墳は県下では絶無である。」

さらに昭和33年には高橋邦彦氏によって、高木(諏訪部)憲氏の所蔵資料をもとに、古墳の現状、これまでの埴輪類の出土状況が報告されている(高橋1958)。今岡重夫氏によってまとめられた『今岡古墳ノート』に掲載された高木憲氏の手紙には、戦前から戦後の今岡古墳での埴輪などの散布状況等がまとめられており、当時の情報を伝える貴重な資料である(今岡1974)。

指定後の最も大きな発見は昭和39年に前方部から組み合わせ式の土製棺が出土したことであった。これを契機として、香川県教育委員会による発掘調査(高橋邦彦、六車恵一)が実施され、昭和39

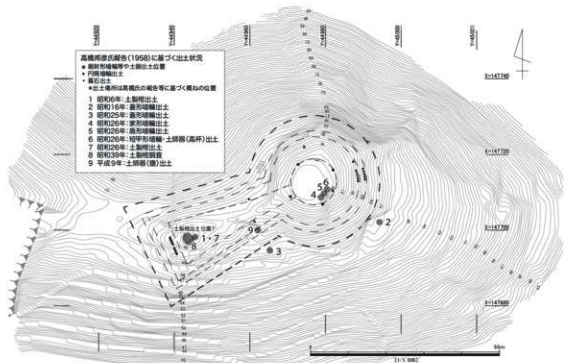
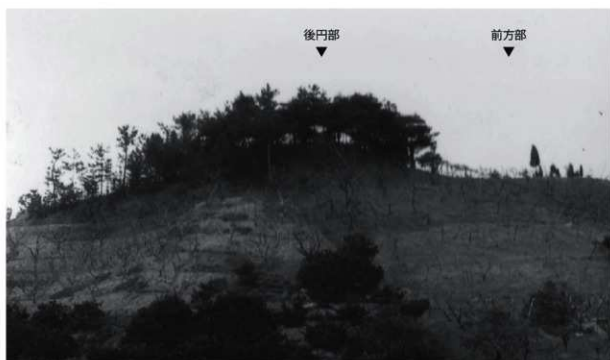


図1 今岡古墳における埴輪などの分布状況



今岡古墳遠景（北から）



土製棺出土状況①



土製棺出土状況②



土製棺調査状況①

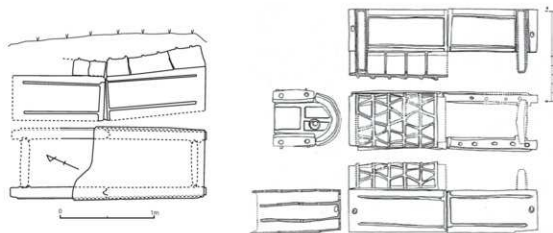


土製棺調査状況②



鏡出土状況

写真1 昭和39年調査時写真（さぬき市教育委員会提供）

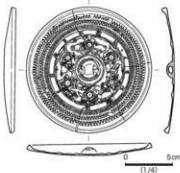


土製棺出土状況(六車1969より)

土製棺実測図(森下1983より)



出土鏡(所蔵:香川県埋蔵文化財センター)



出土鏡実測図(蔵本2021より)



出土勾玉・管玉
(所蔵:香川県埋蔵文化財センター
写真提供:香川県立ミュージアム)

図2 出土した土製棺、鏡、玉類

年12月14日の四国新聞にも取り上げられている。調査によって昭和6年に出土していた土製棺(小口部(横蓋)が前方部の埋葬施設の一部であることが確認されたが、この昭和6年のものの所在は不明で、先の『上笠居村史』で形状などを確認することができる。埋葬施設は古墳の主軸方向にほぼ直交し、長辺側壁(各2枚)と短辺側壁(各1枚)は嵌め込み式で、底のない構造であることが判明した。棺内からは、「上方年」銘獣帯鏡、翡翠製勾玉、管玉、女性人骨が出土した。これらの成果は新聞で報道され、六車恵一氏によって『日本考古学年報』17号で報告された。発掘当時から、土製棺は後期の陶棺と区別され、埴質円蓋組合式陶棺と呼び、詳細な観察に基づく報告がなされている(六車1969)。

その後、円筒埴輪に関する報告(渡部1976)や、鏡に関する報告(大平1978)があり、特に後者によって、鏡の理解が進む。また、昭和58年には、讃岐古墳文化研究会が埴丘測量と陶棺の実測を実施し、前方後円墳の規模は全長60.5m、後円部径27m、前方部長32mと推定した。合わせて、土製棺の実測調査を実施した。その結果、規模(全長208cm、幅65cm、高さ77cm)を明確にし、蓋、長側板、短側板の構造、製作技法について詳細な観察を行った(森下1983)。このほかに、平成9年度に前方部の斜面から土器片が発見されている。

さて、今岡古墳に関連する調査として、高松市中間西井坪遺跡の発掘調査(平成2～3年度(香川県教育委員会1996))によって、土製棺や埴輪の焼成遺構が確認され、当古墳の棺が土師質のものであることから土製棺と認識すべきこと、さらには、製作技術等の詳細な検討から当古墳出土のものが中間西井坪遺跡で生産されたことが指摘された(大久保1996)。この成果は当古墳の価値付けを高めるだけでなく、古墳築造や葬送儀礼の道具立ての生産と供給を考える上で非常に注目される成果として位置付けられる。なお、土製棺は、昭和39年に発掘調査されたもののほかに、既述の昭和6年のものと昭和26年にも掘り出されており、別の個体と考えられている(瀬戸内海歴史民俗資料館1983、大久保1996)。このほかにも、今岡古墳の上方の尾根に所在したとされる首取山古墳からも箱形土製棺の棺身材が寺田貞次氏によって採集されている(大久保1996)。

以上のように、これまでに採集された遺物の状況や調査などによって、墳丘規模、墳丘の表面構造(葺石、円筒埴輪)のほか、後円部周辺で器財形埴輪が集中すること、前方部に2基以上の土製棺の埋葬施設があったことが確認でき、古墳の概要や時期が知られていた。一方で、前方部での発掘調査をのぞき、古墳の規模や構造等を把握するための発掘調査、さらには出土遺物を含めた古墳の総合的な検討は実施されておらず、課題であった。また、現代的課題として、古墳の適切な保護という観点からも、後円部の一部が指定範囲に含まれておらず、古墳の適切な保存を図るために、適正な指定範囲を設定する必要もあった。

このような現状を踏まえ、古墳の保存を適切に図るため、墳丘の規模及び構造の把握を目的として、香川県教育委員会(以下、県教委)と高松市教育委員会(以下、市教委)が協議し、平成29年度から令和元年度にかけて、各年度でそれぞれに実施可能な範囲でトレンチ調査を実施した。調査費用は各トレンチごとに各機関が負担して実施した。また、整理作業及び本書の執筆は、各機関で実施し、本書の印刷は、市教委が実施し、執筆頁応分で費用負担を行った。なお、県教委による整理作業以外は、国庫補助事業で実施している。

上記の発掘調査の成果を踏まえ、適切な保護を図るための範囲の検討を墳丘の範囲に基づき行った。その後、土地所有者からの追加指定の申請を受け、令和4年2月に香川県教育委員会から香川県文化財保護審議会に諮問し、即日答申を受け、県教委で決定し、令和4年3月31日付けの県報告示によって、後円部、前方部の一部が追加指定され、墳丘から離れた部分の一部が解除された。

なお、本書における県教委が実施した調査に関わる資料及び出土遺物は、市教委に移管し、保存を図る予定である。(渡邊)

第2節 経過

平成29年度から令和5年度にかけて実施した発掘調査及び本書作成のための整理作業の経過は以下のとおりである。(渡邊)

【発掘調査】

平成29年度

平成30年3月12～19日 高松市創造都市推進局文化財課 波多野篤・香川将慶
香川県埋蔵文化財センター 竹内裕貴

平成30年度

平成31年3月12～22日 香川県埋蔵文化財センター 竹内裕貴

令和元年度

令和2年3月9～25日 高松市創造都市推進局文化財課 波多野篤・香川将慶
香川県埋蔵文化財センター 蔵本晋司

【整理作業】

令和2年度

香川県埋蔵文化財センター調査分の整理作業
香川県埋蔵文化財センター 蔵本晋司・竹内裕貴

令和3～4年度

高松市文化財課調査分の整理作業・執筆
高松市創造都市推進局文化財課 香川将慶・波多野篤

令和5年度

追加整理作業・執筆・編集
香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課 渡邊誠
香川県埋蔵文化財センター 真鍋貴匡

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

今岡古墳は高松市の西部、五色台山地と石清尾山山塊に挟まれた東西約2kmの沖積平野の西側に位置する。高松平野西端に屹立する勝賀山（標高364m）より南東に派生する尾根端頂部（標高62m）に築造された古墳である。古墳の前には本津川が北流し、本津川を介して石清尾山と対峙する。古墳は、勝賀山東麓の丘陵群の中で、最も東に長く張り出した丘陵上に築造されている。古墳からは、前面に所在する石清尾山により東への眺望を遮られるが、北は本津川河口から瀬戸内海が、南は香東川下～中流域の高松平野西縁部及び遠く讃岐山脈を眺望することが可能で、特に、当時は海岸線が内陸に及んでいたと考えられ、現在以上に海も意識した立地であったと考えられる。いずれにしても、こうした可視範囲を意識して、本墳の築造位置が選定されたと考えられる。

周辺の山塊は花崗岩塊の頂部に浸食を受けにくい安山岩が分布しメサ地形を形成している。勝賀山の東麓は傾斜面が発達しており、いくつかの丘陵がある。開析谷の発達は顕著ではないが、その丘陵に挟まれた間には、中腹から山麓部にかけて小規模な谷があり、それを利用したため池が点在する。当該地域における遺跡が立地する扇状地はこれらの谷川が運搬した砂礫によって形成されている。当遺跡の東側には本津川が北流しており、それに平行して袋山東麓の衣掛付近から北東方へと至る比高差1mほどの段丘崖の東部の低地は本津川の氾濫原である。（渡邊）



図3 今岡古墳の位置

第2節 歴史的環境

今岡古墳の周辺では、様々な遺跡の調査が実施され、既に歴史的環境については整理がなされているので、本項では、古墳の展開の概要について整理しておく。

今岡古墳が所在する高松平野西部では、石清尾山山塊に石清尾山古墳群が展開する。前期初頭の鶴尾神社4号墳をはじめとして、前期末の石船塚古墳まで、積石による多数の前方後円墳、双方中円墳が築造され、各尾根に複数系譜による墓域の形成が推測されている。山塊中では、前期末に積石塚古墳の築造が終焉を迎え、再度、古墳の築造が認められるのは、古墳時代後期で、横穴式石室を持つ群集墳が盛行する時期である。特に、浄願寺山は、山頂の平坦面上に短期間に50基以上の群集墳が形成される。

一方、今岡古墳が所在する勝賀山東麓周辺に目を向けると、前期にはかしが谷古墳群があり、先の石清尾山古墳群の築造停止に呼応するように中期初頭に今岡古墳が築造される。その後、古墳の築造が確認できない期間を経て、後期に神高古墳群（古宮古墳、鬼無大塚古墳、平木古墳1～4号墳等）が築かれるなど、勝賀山東麓の緩斜面を中心に墓域が展開する。勝賀山塊と石清尾山山塊に挟まれた本津川、香東川の河口部周辺に、中期から後期前半に位置付けられる古墳が点在する。具体的には相作馬塚古墳、相作牛塚古墳があり、そのほか、埴輪の採集状況から、弦打王墓、青木1号塚等が古墳である可能性が想定される。また、実態は未解明であるが、周辺には塚が多数存在し、これらの塚は小型で低平な集石によって構築されているものが大半で、なかには相作馬塚古墳のように塚状の高まりを有するものも含まれており、一部に古墳が改変されて塚として再構築されたものが含まれていることも想定される。

このほか、今岡古墳との関係では、図4のさらに南部になるが、今岡古墳とは異なる割竹形土製棺



1 今岡古墳、2 沢池西古墳、3 かしが谷1~4号墳、4 山の神1号墳、5 虎池西古墳、6 木舟池下古墳、7 鬼無大塚古墳、8 神高池西古墳、9 こめ塚古墳、10 神高池北西古墳、11 神高池南西古墳1号墳、12 神高池南西古墳2号墳、13 相作馬塚古墳、14 相作牛塚古墳、15 王墓古墳、16 飯田西1~4・7~37号塚、17 青木1~14号塚、18 紙道1~26号塚、19 半田池南小塚、20 鬼塚古墳、21 袋山古墳跡、22 御殿1~5号塚、23 御殿大塚、24 大將軍1・2号塚、25 檜紙南部1~5・7・12号塚、26 中森1・2号塚、27 成合1号塚、28 御殿南部1~10号塚、29 御殿天神社古墳、30 西方寺4~6号塚、31 木里神社1~6号塚、32 石清尾山古墳群(磨鉢谷西斜面古墳、磨鉢谷東斜面古墳を含む)、33 御殿神社1~4号塚、34 御殿野水池1~3号塚、35 野山1~11号塚、36 北山浦1~3号塚、37 南山浦1~13号塚、38 片山池1~3号塚、39 淨願寺山古墳群、40 淨願寺山56号塚、41 淨願寺山57号塚、42 小山山頂古墳、43 がの塚2~4号塚、44 がの塚古墳

図4 今岡古墳と高松平野西部の古墳分布
(高松市教育委員会他 2017『相作馬塚古墳』Ⅱをもとに加筆・修正)

が大形堅穴建物から出土している中間西井坪遺跡、円筒形土製棺が出土している本津川流域の堂山南東麓に位置する本発寺古墳があり、本津川流域に偏在している。また、今岡古墳や本発寺古墳の事例から、大形前方後円墳の従属埋葬や円墳の埋葬主体という点で、本津川流域を統括する首長層ではない点(大久保 1996)も注目される。(渡邊)

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

古墳の規模及び構造の把握を目的として、トレンチ調査による発掘調査を実施した。最終的に、後円部に3箇所、前方部に3箇所でトレンチ調査を実施した。各トレンチについては下記の表1・図5のとおりであり、平成29年度に後円部、平成30年度に前方部の墳端、構造の確認を目的に調査を実施した。令和元年度は2カ年の調査を踏まえて、後円部、前方部で追加調査を実施し、特に、前方部北側面において、平成30年度の調査で明らかとなった墳丘盛土とその下位の平坦面を確認することを目的に調査を実施した。

以下に、各トレンチの調査成果を記載する。(渡邊)

表1 トレンチ一覧

トレンチ名	年度	規模	目的	調査担当
1トレンチ	平成29年度	幅1.0m×長さ12.6m	主軸上での後円部墳端の確認	県埋蔵文化財センター
2トレンチ	平成29年度	幅1.0m×長さ4.3m	後円部墳端の確認	市教委
3トレンチ	平成30年度	幅1.0m×長さ10.2m	主軸方向での前方部墳端の確認	県埋蔵文化財センター
4トレンチ	平成30年度	幅1.0m×長さ10.6m	前方部の広がりの確認	県埋蔵文化財センター
5トレンチ	令和元年度	幅1.0m×長さ9.2m	後円部墳端の確認	県埋蔵文化財センター
6トレンチ	令和元年度	幅1.0m×長さ9.1m	前方部の形状及び墳端の確認	市教委

第2節 調査の成果

1) 1トレンチ (図6)

1トレンチは墳丘の主軸方向で後円部の墳端と構造の把握を目的として設定したトレンチである。

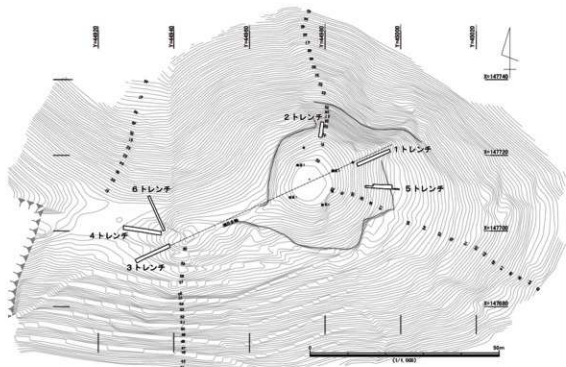


図5 墳丘測量図及びトレンチ配置図

現地形の状況からも墳丘の残存状況が良いと判断された場所で、墳端のみならず、墳丘構造を把握するために最も適切な場所と考慮して選定した。

①土層

地山より上位の堆積層は、10層に分層した。表土である1層より下は、古墳からの流出土を含む流土（2～8層）があり、そのうち、6・7層は埴輪や転落石（円礫）の量が多く、形態が判明する埴輪片も出土している。9・10層は攪乱坑である。基盤層である11層は地山と考えられる風化が進んだ花崗岩で、細粒化して土壌化した箇所もある。

②遺構

墳丘構築時の盛土や葺石は確認できていない。確認した斜面部となっている地山で、2箇所の傾斜変化点と2つの平坦面を確認した。これらはかつての墳丘のテラス面の痕跡となる可能性が高い。本トレンチで確認された上側の平坦面（平坦面1）と近似する標高で、他の調査区においても平坦面を確認している。下側の平坦面より東側は、2mほど平坦な面が続いた後に、緩やかな傾斜で丘陵本来の斜面に至る。下側の平坦面が、後世開墾等に伴う可能性も否定できず、後部で明確な墳端は特定できないものの、少なくとも下側の平坦面より西側（上位）が古墳の墳丘の範囲と言える。

③遺物

円筒埴輪の破片が多量に出土したほか、壺形埴輪、形象埴輪と考えられる破片も出土している。他の層も含め、流土中に古墳時代以降の遺物は確認できなかった。埴輪のほか、土師質土器の椀が表採された。（渡邊）

2) 2トレンチ (図6)

2トレンチは1トレンチから北に約60度振った位置に当たる。地形の傾斜が変わる場所で、後円部北側の墳端と構造の把握を目的として設定したトレンチである。当該箇所より南東側は後世の地形変化が認められたため、墳丘の残存状況が良いと想定される場所を選定した。

調査は幅1mで掘削を実施した。ただし、拳大の川原石が確認された箇所を残し、西側幅0.5mを掘削して一部地山まで掘り下げた。

①土層

概ね3層に区分でき、1・2層が表土、3、4層が流土、その下に地山の風化したパイラン土（8層）がある。なお、5～7層は掘り込み状を呈するが、木根による攪乱である。流土には埴輪片、拳大の川原石が含まれていた。

②遺構

本トレンチ内では盛土と見られる土層は認められず、上方からの流土と考えられる土層の下位で地山を確認した。地山上面の標高58.46m付近では、幅約0.8mの平坦面（平坦面1）を確認した。平坦面1上には拳大の礫が集中して認められたが、不規則の配置であることなどから、原位置での出土ではないと考えられる。1トレンチの平坦面1の標高値と近似することから、本トレンチの平坦面1も墳丘のテラス面の痕跡となる可能性が高い。なお、本トレンチでは墳端は確定できなかったが、1トレンチの調査成果から本来はさらに外側へと墳丘が続いていたと推定される。

③遺物

流土内から、円筒埴輪の胴部片が出土した。（香川・波多野）

3) 3トレンチ (図7)

3トレンチは墳丘主軸方向の前部部の墳端と構造の把握を目的として設定した。前部部の標高が高くなる場所から西側へと降る場所で、さらに外側には平坦な地形が広がっていることから、墳端を確認できる可能性の高い場所と判断した。

調査は幅1mで表土の掘削を実施した後、北側幅0.5mで地山までの掘削を行い、墳丘構造の把握を行った。

①土層

表土下には古墳築造以降の流土が堆積しており、地山より上位の堆積層は8層に分層した。表土（1層）下には、少量の埴輪、葺石として利用していた可能性の高い円礫を含む流土（2～7層）を確認した。8層は3層から掘り込むもので、風倒木痕などと考えられる。流土を除去した後、調査区西側（墳裾側）では花崗岩質の基盤層（地山）を確認した。調査区東側の墳頂に向かい斜面が急峻となる地点では、流土下で盛土と考えられる細かな単位の層状堆積（a～m層）を確認した。

②遺構

盛土より西側では、地山が本来の傾斜に対し部分的に平坦になる範囲を確認でき、その標高は58.4mで、平成29年度の後円部の調査で検出した平坦面とほぼ同一の高さである。調査区西側の墳裾部分については、後世の開墾により大きく改変を加えられていることが明らかであり、本来の墳丘端を確認することはできなかった。

古墳の盛土は、地山起源のにぶい黄褐色、にぶい黄橙色の極細砂で、薄く層状（層厚4～16cm）に水平面を構築するように盛土を行っている。本来の墳丘表面は流出しているが、古墳築造時は、削り込むことで墳形を造り出したと考えられる。また、この盛土の西側で平坦面の痕跡を確認でき、墳端と考えられる。

③遺物

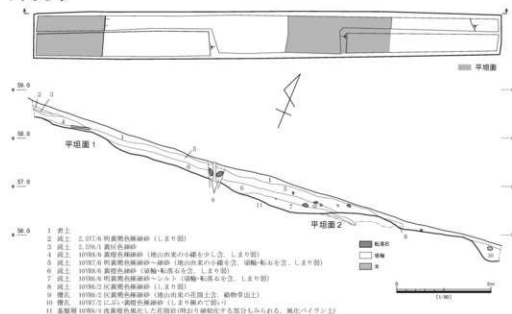
円筒埴輪の破片が出土した。（渡邊）

4) 4トレンチ (図7)

4トレンチは3トレンチで把握した墳丘盛土と平坦面1の外側の状況を確認するために、3トレンチの北側で西側へと緩かに傾斜する斜面に位置する場所に設定したトレンチである。近接するが、3トレンチよりも緩やかな斜面であるため、墳丘の残存状況が良いと想定される場所であった。

調査は幅1mで表土を掘削した後、南側幅0.4mで掘削を行い、地山までの掘削を行い、墳丘構造

1トレンチ



2トレンチ

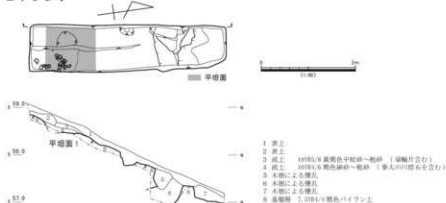
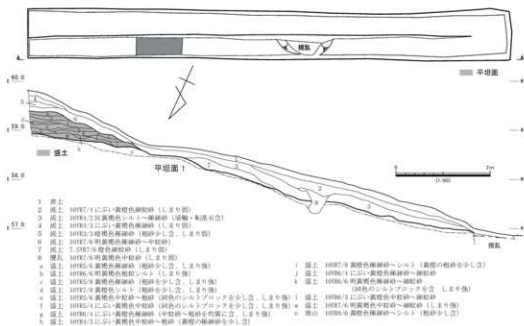


図6 1・2トレンチ 平・断面図 (S=1/80)

3 トレンチ



4 トレンチ

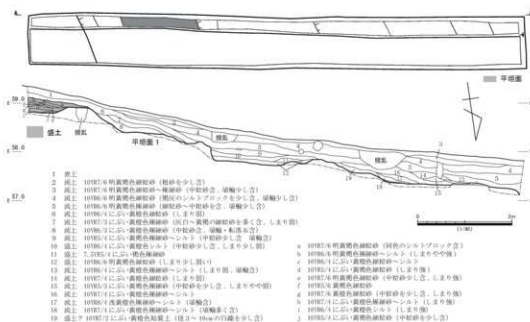


図7 3・4 トレンチ 平・断面図 (S=1/80)

の把握を行った。

①土層

土層は19層に分層でき、表土(1層)下には古墳築造以降の流土(2～9、13～18層)が堆積し、流土には埋輪片を包含する層が多い。トレンチの東端で墳丘盛土と考えられる細かい単位の層状堆積(a～j層)を確認し、さらにその西側で平坦面を確認した。さらに西側は掘り込み状の段があり、当該箇所のみ水平堆積(9～12層)が確認できる。9層は埋輪を含むため流土と考えられるが、10～12層は平坦面を構築するための盛土の可能性もある。

②遺構

墳頂からの堆積状況は3トレンチと類似しており、地山の標高58.4mあたりの平坦面1の上位において盛土を確認した。墳裾部は他のトレンチとは異なり、地山が土手状となり、盛土の土留めのような役割を果たしている。3トレンチは盛土の外側に平坦面があり、この平坦面が墳端と考えられるが、本トレンチでは、2箇所でも平坦な場所が確認できる。トレンチが墳丘主軸に斜交することもあり、平坦面1より下位の平坦面に明瞭な段の痕跡は確認できていない。この平坦面は3トレンチにおいても、平坦面1より下位では後世の改変のためか確認できていない。最下段の平坦面は明瞭であり、既述のとおり、平坦面の上に、一部円礫と粘質土が混ざる層(10・11層)が水平堆積しており、層厚も薄いことから平坦面上の盛土を行っている可能性が考えられる。平坦面の上面では、比較的大ぶりの円筒埴輪片が検出され、古墳築造以後の改変がそれほど及んでいない状況がみられた。この平坦面は、丘陵の背部の西側においてもさらに続き、トレンチの西端では、地形に沿わず基盤層が下がる状況が確認できることから、人為的な改変の痕跡が読み取れ、少なくともこの平坦面の下がりまでは、古墳築造に伴う改変が及ぶ範囲であると判断した。

なお、本トレンチの平坦面1は、削平による残存状況が悪いこと、墳丘の主軸に斜交することから、平坦面に十分な検出が困難であったため、正確な規模は判然としない。盛土及びその範囲から、盛土によって墳丘が構築されていた可能性が想定できる。また、前方部墳端より外側は地形整形による造成の痕跡を確認することができた。

③遺物

多量の円筒埴輪、形象埴輪の蓋形、不明品、土製棺の破片が出土した。(渡邊)

5) 5トレンチ (図8)

5トレンチは平成29年度の調査を踏まえ、1トレンチから南へ約45度振った場所に設定したトレンチである。1トレンチで確認した2つの平坦面と墳丘構造の把握を目的として調査を行った。当該箇所は、墳丘へと登る道に位置し、墳端と考えられる場所には平坦面が広がっており、墳端の把握が期待されるトレンチであった。

調査は、幅0.5mで掘削を行い、平坦面1より下方での状況を確認するために、北側を幅1mまで拡張し、東側へ幅0.2m、延長2mで拡張し、平坦面2の広がりを確認した。

①土層

現代の攪乱土(1層)や表土(2層)、近年の果樹園造成時と考えられる造成土(3層)、旧表土(4層)を取り除くと、トレンチ中央部の2箇所で長径1.2m前後の土坑状の落ち込み(5層)を検出した。いずれも埴輪片や葺石と考えられる円礫を含む斜面堆積土(6層)上面より掘り込まれていることから、近年の植樹痕もしくは風倒木痕と考えられる。

上述した斜面堆積土の下面では、トレンチ中央部で花崗岩の岩盤が露出し、その上下で平坦面を検出し、その上面で流土(7・8層)を確認した。上位の平坦面(平坦面1)は、標高57.95m～58.25m以上で検出した、幅1.8m以上のテラス面で、上位に埴輪片を含む流土(7層)が堆積していた。

②遺構

本トレンチの平坦面1は、1トレンチの平坦面1とやや検出した標高値は異なるものの、一連の平坦面の可能性が高いと判断される。7層中からは、埴輪片や葺石と考えられる円礫以外に遺物は出土しておらず、古墳築造後の比較的早い時期に、上位の墳丘の一部が崩落・堆積したものと考えられ、テラス面は古墳築造時のものである可能性が高いが、礫敷等の遺構は認められなかった。

下位の平坦面2は、標高56.45m前後で検出した、幅1.4m以上の平坦面で、より東側は現代の攪乱溝や果樹園造成時の削平を受けており、正確な幅は明らかではない。平坦面上には、暗灰黄色土の流土層(8層)が堆積するが、本層からは埴輪片や葺石は一切出土していない。人為的な盛土層である可能性は低く、墳丘1段斜面部の崩落土である可能性が考えられ、1段斜面部は地山を削り出したままで葺石等は施されず、またそのテラス面上には埴輪が樹立されていなかった可能性を示唆している。

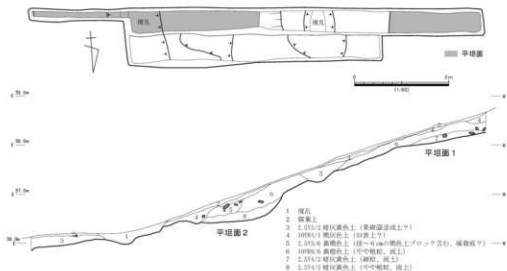
③遺物

多量の円筒埴輪、土製棺の破片が出土している。(渡邊)

6) 6トレンチ (図8)

6トレンチは、古墳の主軸に対してほぼ直交する前方部北側面に設定した調査区である。トレンチ上方付近は大きく窪んだ地形となっており、この部分の墳丘は後世の改変を受けている可能性も想定

5 トレンチ



6 トレンチ

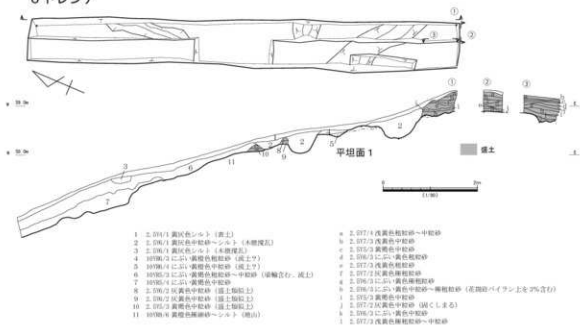


図8 5・6 トレンチ 平・断面図 (S=1/80)

された。

調査は、掘削箇所を最小限にすることを考慮して、まずは1m幅で表土を除去し、その後はトレンチ東側を0.4m幅で断ち割り、断面で墳丘構造等を確認することとした。その後、断面のみの確認では状況を把握できなかったため、1m幅で表土よりも下位の土層を掘削して平面で状況を把握するという手順で進めた。

①土層

基本となる層序は大別して3層にまとめることができる。上位の土層から順に、5cm程度の層厚で数点の埴輪片を含む表土層（1層）、トレンチ下方に厚く堆積する傾向がある流土と考えられるにぶい黄褐色粗粒砂～中粒砂及びにぶい黄褐色中粒砂（6・7層）、地山となる花崗岩のバイラン土（11層）である。なお、流土については少なくとも2層に細別でき、上位の土層（6層）はトレンチ下方から円筒埴輪等の破片が5点ほど集中して出土したことから、古墳築造後の流土と言える。一方、下位の土層（7層）はトレンチ下方のみで認められ、埴輪片は出土していない。層相も6層とは異なり粒径が比較的均一と言える。以上を踏まえると、7層についても地山上に堆積する流土と考えられる

が、古墳築造前にすでに堆積していた可能性もある。

トレンチ内の各所で普遍的に認められた土層は以上のとおりだが、これに加えて、トレンチ上方で浅黄色細粒砂～中粒砂等の土層が5cm程度の厚さでほぼ水平に堆積する複数の土層(a～1層)を確認した。この土層の特徴は、固く締まる土層や比較的緩い土層など硬度や層相も異なる土層が細かい単位で堆積している点で、層相の特徴と前方部前端に設けられた3・4トレンチの調査成果も踏まえるとも、墳丘盛土と考えられる。木根の攪乱で破壊されるため遺存する範囲ではあるが、盛土は少なくともトレンチ上方から約2.0m下方まで確認できた。トレンチ上方での盛土の厚さは最大で0.4m、盛土基底部の標高値は約58.9mである。

②遺構

トレンチ上方で墳丘盛土を確認し、その下方に当たる標高58.5m付近で傾斜が緩やかとなる地形面を確認した。上・下方を木根の攪乱で破壊されているため正確な数値は不明だが、少なくとも1m以上の幅がほぼ平坦な地形面と考えられる。この付近は後世の変更が認められた箇所だが、上方に墳丘盛土が存在する点、前方部前端に設けた3・4トレンチで検出した平坦面と標高値が近似する点から、古墳築造に伴い形成された平坦面(平坦面1)と考えられる。なお、平坦面1の下方付近で流土とは異なりむしろ墳丘盛土と類似する土層(8～10層)を確認した。トレンチ西壁の断面においても、流土の下位に同様の土層が認められた。表土直下の平面精査の際にも、流土とは明確に識別できる状況でこの土層を確認している。このことと、隣接する4トレンチでも平坦面上に盛土と考えられる土層が確認されていることから、本土層は平坦面を形成するための盛土となる可能性が考えられる。平坦面1よりも下方については、丘陵の地形と同様に下方に向けて下る地形であり、トレンチを設定した範囲では明確に加工されたと言える状況は確認できなかった。

このほか、本トレンチでは葺石となりうるような大きさの石材が1～2点程度出土したが、いずれも原位置をとどめる状況では出土しておらず、葺石などの墳丘外表施設は認められなかった。

③遺物

トレンチ下方の流土中から円筒埴輪の胴部片が出土した。(香川・波多野)

第3節 出土遺物(図9・10)

平成29年度から令和元年度の3カ年の調査では、28リットルコンテナ5箱分の埴輪と葺石材が出土した。そのうち埴輪の部位が特定できるもの、もしくは特徴的な埴輪を抽出し報告する。なお埴輪が出土した層位は、ほとんどが古墳盛土の流出土か表面採集などであり原位置を保つものはなく、また器種ごとの出土位置の傾向がみられないことから、器種ごとにまとめて報告し、出土調査区や層位は観察表を参照されたい。埴輪の胎土は直径1～3mm程度の長石・石英を含み、石英を包含するゲイサイトが焼成によって赤変した粒を含むなど、器種関係なく共通している。また、今岡古墳へ供給したと考えられている中間西井坪遺跡出土資料とも胎土は共通している。今回出土した埴輪は、壺形埴輪(1～3)、円筒埴輪(4～65)、蓋形埴輪(66～69)、不明形象埴輪(70・71)、土製棺(72～75)、西村型土器椀(76)がある。また、円筒埴輪として報告するものの内、口縁部以外の破片については円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪、形象埴輪の胴部・底部の可能性はあるものの、調整や形状から区別できないことから、一括して円筒埴輪として報告する。なお、葺石の転落材もコンテナ1箱分ほど持ち帰っているが、石材の図化は行っていない。石材の材質は安山岩で、石材の角は丸く、今岡古墳の東側を北流する本津川から採集した河原石とみられる。

壺形埴輪(1～3)

壺形埴輪の口縁部である。円筒埴輪の口縁部より器壁が薄く、外反しながら端部にいたり端部をわずかに上方に拡張させる1・2、直線もしくはやや内湾気味に開きながら端部にいたり、端部を上方に拡張させる3がある。いずれも東四国系壺形埴輪の口縁部と考えられる(藤本2004)。壺形埴輪がどのように樹立されていたかは、原位置を保つ資料がないため判断できないが、円筒埴輪に比べ極端に破片数が少ないものの、後円部・前方部を問わず出土していることから、後円部・前方部の限定された箇所に樹立されていたものと考えられる。

円筒埴輪(4～65)

口縁部は4～17、胴部は18～60、底部は61～65がある。口縁部はやや外反し端部にいたり端部は面をしっかりとつ4～6、外反し端部を矩形もしくは丸くおさめる7～11・17、直線的に口縁

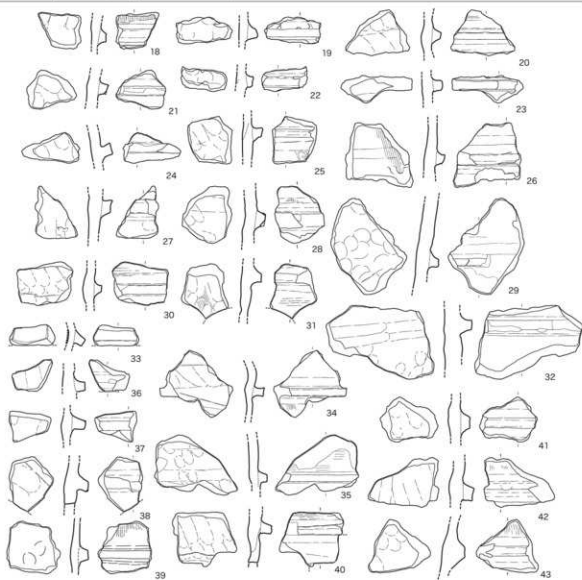
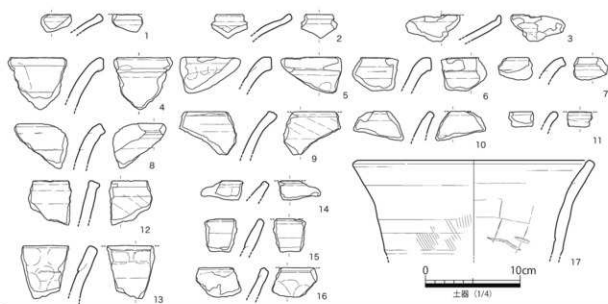


図9 出土埴輪① (S= 1/4)

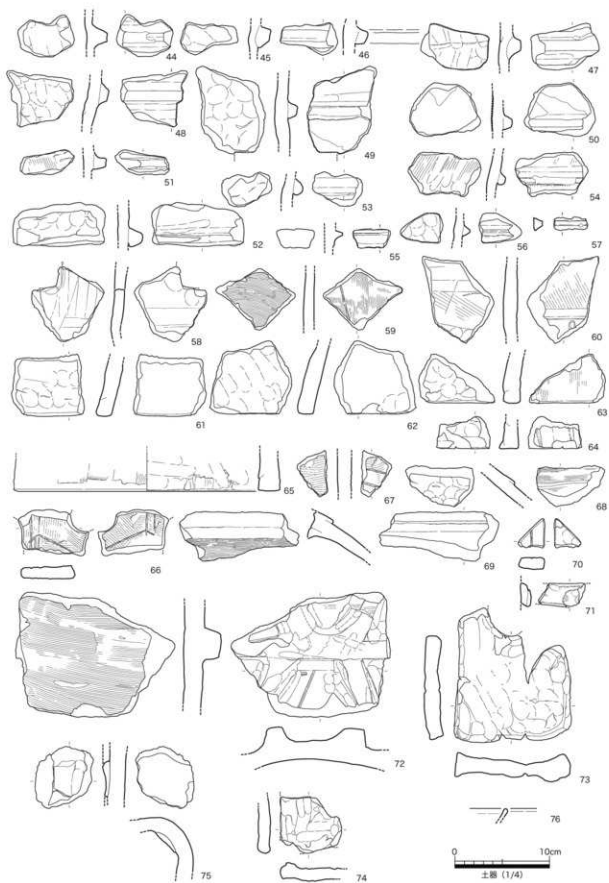


図10 出土埴輪②・出土土器 (S= 1/4)

端部までいたり端部を丸くする12～16がある。17は口径25.6cmに復元される。突帯はその断面形状と突出度合いからa～eの5つに分類できる。a類とした18～32は断面形状が台形もしくは長方形を呈し、突出度合いは0.5前後を測り、出土量が最も多い。b類とした33～38、40は断面形状が長方形で、突出度合いは1に近く、突出度合いは最も高い。c類とした39、41～45はa類と同様に断面形状が台形を呈しているが、突出度合いが0.5以下で、突帯の基部が広く、最大3.0cmを測る。d類とした49～53は断面形状が台形を呈するが、全体的に丸くおさまられている。また、突帯下端のナデ成形が弱く、突帯の貼り付けが甘いものが多い。e類とした55～57は断面形状が三角形ないしは台形を呈するが、基部の幅が1.0cm前後と最も小さい。出土量も3点とほかのものより極端に少ない。スカシは31・38の円形と58の方形がある。60は突帯の剥離に突帯設定技法の方形刺突が確認できる。59は胴部に線刻が1条確認でき、ヘラ記号の可能性もある。61～63の器壁はやや外傾して立ち上がる。63は外面にタテハケ調整が施される。64・65は直立気味に器壁が立ち上がる形態で、65は外面にタテハケ調整が見られる。また両者ともに底面は平滑であり、木目が底面に転写されていることから、板材を台として製作されたものと考えられる。

蓋形埴輪 (66～69)

66、67は立飾りと考えられる。66は表裏に同じ線刻があり、二条の境界線に直交するように山形の線刻がある。67は二条平行の線刻がある。両者ともにハケ調整が施された後に、線刻が施される。68・69は笠部と考えられる。69は内面に丁寧なハケ調整が施される。

不明形象埴輪 (70・71)

70は一面にのみ線刻があり、線刻がない面はナデ調整が施されている。蓋形埴輪の立飾りとも考えたが、66・67のようにハケ調整が施されず、線刻も1面のみであることから不明形象埴輪として報告する。71は帯状の土台に円形の粘土が貼り付けられている。帯状の土台も裏面は剥離痕跡があり、どこかに貼り付けられていたものと考えられる。胎土や焼成、色調ともに他の埴輪と共通していることから埴輪と考えられるが、部位が不明であり器種を特定しえない。

土製棺 (72～75)

72は土製棺の蓋と考えられる。蓋表には突帯が貼り付けられている。文様の形状から、昭和39年に前部から出土した組合式陶棺(森下1983)の蓋と同様の亀甲文と考えられる。突帯の剥離部分の線刻や調整などの観察から突帯の貼り付け順序は、以下のように復元される。①ハケ調整後に突帯を貼り付ける目印となる線刻を施す。②棺蓋の長軸に直交する突帯を貼り付ける。③軸となる突帯から斜行する突帯を貼り付ける。また突帯貼り付けの目印となる線刻から、ズレた位置に突帯が貼り付けられている箇所もみられることから、線刻はあくまでも目印のようである。今岡古墳における土製棺は、前部出土の1例(森下1983)、採集品の2例(大久保1996)の合計3例が知られている。このうち今回報告の土製棺の蓋のうち72は、採集品の中でも亀甲文をもつ蓋に類似する資料とみられる。73・74は箱形棺身材の内側底面につけられた補強材と考えられる。調整は一方の面しか施されず、端面ともう一方の面は箱形棺身材内側の器壁に押し当てられるだけであるため、調整はない。73は焼成前に穿孔された円形のスカシがある。これは箱形棺身材の底面にスカシを穿孔する際に、一緒に穿孔されたものと考えられる。75は棺身の隅と考えられ、隅はやや丸みをおびており、直角よりやや鋭角に曲がる。内側に粘土帯による補強が施されている。

西村型土器椀 (76)

76は西村型土器椀の口縁部である。斜め上方に開き、端部を丸くおさめる。口径は復元しえなかった。(真鍋)

第4節 小結

1) 古墳の墳丘構造とその構築方法について(図11・12)

以上の調査成果を踏まえ、まず、墳丘構造と構築方法について整理しておきたい。

墳端を画する施設は確認できなかったが、1、5トレンチで墳丘裾部より外方に不定形に広がる平坦面2を確認しており、この平坦面が墳丘構築前の地山成形による造成の痕跡と考えられる。そのた

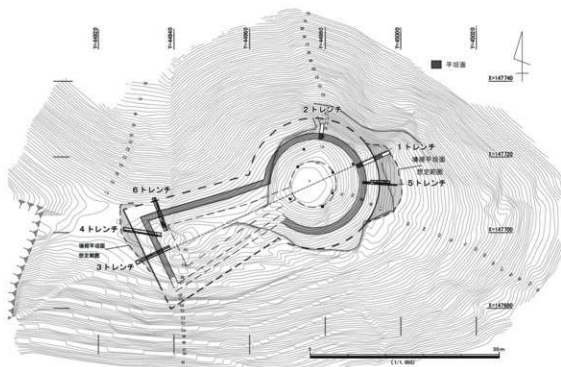


図 11 調査に基づく墳丘復元図 (S= 1/1000)

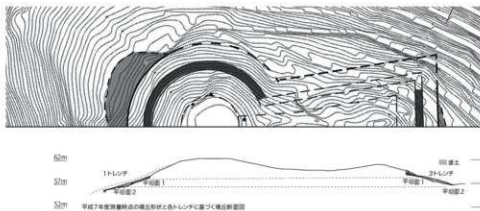


図 12 墳丘断面図 (S= 1/800)

め、これより上位層が墳丘に当たると考えられる。今回の調査によって、後円部、前方部の墳端を確定し、全長 65.9m に及ぶことが明らかとなった。

後円部は 1、2、5 トレンチの調査結果から、平坦面 1 が墳丘の第 1 段のテラス面で、1 段目の墳丘高は 1.5 ～ 1.8m に復元できる。1 段目は盛土等は認められず、基盤層を削り出して造成されたと考えられる。また、2 トレンチで葦石に利用された可能性のある円礫が出土したが、5 トレンチでは基底部テラス面上に堆積した流入土中に葦石や埴輪が認められなかったため、墳丘斜面部に葦石が設置されていたか等については不明で、今後の検討課題である。1 段目テラス面への円筒埴輪の設置の有無も同様に今後の課題であるが、今回の調査成果から考えると可能性は低いと考えられる。なお、後円部の第 1 段のテラス面から墳頂部までの高さは 4m 前後を測ることから、さらにテラス面があったと考えられ、後円部は 3 段築成であった可能性が想定されるが、この点も今後の課題である。

前方部は、3、4、6 トレンチの調査結果から、平坦面 1 が後円部同様に墳丘の第 1 段のテラス面で、後円部と同一高さで連続すると考えられる。一方で、平坦面 1 より上位は薄い層状の盛土による造成である。6 トレンチの状況から、平端面より下方は地形が変換し北へ下る地形となるため、地形変換点よりも上方が古墳築造に伴い加工された範囲と推定できるが、地形を生かした墳丘構築方法を

行っていることを前提と考えれば、盛土の範囲は元の地形をどのような範囲でどの程度改変しているかということに規定されるため、その明確な範囲については今後の課題でもある。また、4・6トレンチでは1段目のテラス面の下位でも盛土層と考えられる薄い層状盛土が確認されており、非常に断片的ではあるが、墳丘構築時に部分的に盛土を行った箇所があった可能性を示唆する。

一方で、トレンチ内で転落した墓石等も見られず、かつ前端部の調査でも原位置の墓石を検出していないことを考慮すると、この地形変換点が前方部北側面の墳丘範囲を示す最大の根拠とも言える。

なお、以上の成果を踏まえて復元した墳形が図11である。

さて、今回の発掘調査後、図12を作成して墳丘断面について検討を行った。今回調査で使用した地形図は平成7年度に作成したものであるが、1トレンチが位置する後円部の現在の標高値は当時のものと異なることが確認された。平成7年当時の表面形状を示す線が図12破線部分で、その下の実線部分が今回の調査における計測値に基づいた墳丘の形状を示すラインである。この標高差は測量誤差ではなく、20年ほど経過する中で削平されたと考えざるを得ないが、現況からすると雨水などによる影響が想定される。今後の状況を確認しつつ、状況に応じて必要な保存の措置を検討する必要もあろう。

前方部前面の基底部の標高は57.4m前後、後円部前面の基底部の標高は56.4m前後であることから、後円部と前方部の比高差が約1mとなり、墳丘基底部が水平に近く設定されている。この点に加えて、1・2・5トレンチの状況から後円部基底線はほぼ正円を描くことが想定されることから、本地域の前期以来の丘陵上に立地する前方後円墳の築造方法等の変遷観の中では、より新しい様相の特徴と考えられる(蔵本1995)。

以上の成果を総合すると、丘陵の本来の形状をある程度利用し、具体的な範囲は不明であるが、少なくとも墳端に当たる範囲は平坦面を造成し、その上で墳丘を構築したと考えられる。その墳丘構造は、前方部、後円部ともに第1テラス面より上位が薄い層状盛土による造成で、それより下位は地山成形を想定している。ただし、調査成果から言えば、前方部のテラス面より下位でも局所的な窪地などは盛土で造成している可能性があり、後円部でも、テラス面より上位も地山成形の可能性が残されており、今後の調査で検証する必要がある。また、前方部の詳細な形状、墳丘の外表施設、その構築方法も、今回の調査では明らかにすることはできなかったため、本古墳の評価に関わる重要な課題である。(渡邊)

2) 出土埴輪

今岡古墳出土埴輪について、現在までに出土した埴輪からまとめておく。

器種構成は過去に報告された埴輪を含めて提示すると、壺形埴輪、円筒埴輪、朝顔形埴輪があり、形象埴輪には家、蓋、甲冑、盾、鳥形埴輪、半裁器台形がある。

円筒埴輪の諸特徴をまとめると、黒斑を有し、主要な2次調整はタテハケであるが、過去に表面採集された香川県埋蔵文化財センターが保管する資料(一部未報告を含む(蔵本2017))に、明瞭ではないがB種ヨコハケが少数ながら存在する(蔵本2017)。また、現状では鱗がつく埴輪は確認できないことから、埴輪検討会編年(埴輪検討会2022)にあてはめるとⅢ期に位置付けられる。

また多様な形象埴輪のほかに、古墳時代前期以来の壺形埴輪を伴っていることから、畿内の強い影響を受けながらも、伝統的な埴輪のあり方を踏襲しているといえる。(真鍋)

第4章 関連資料

第1節 今岡古墳関連採集資料（高松市教育委員会所蔵）について（図13・14）

高松市教育委員会には市民が今岡古墳上や古墳周辺で採集した遺物を収蔵している。注記等から採集地が特定できるものもあり、資料の多くは今岡古墳で採集されているが、墳丘上の採集地点が不明なもの、古墳周辺（個人宅地内等）で採集されている等、詳細な採集地が不明な資料が多い。しかし、土製棺や埴輪といった今岡古墳の歴史を明らかにする上で欠かせない資料であり、周辺部の採集資料も古墳築造前後の状況を把握する上で重要であると考えられることから、本報告書に掲載をする。なお、今回掲載する資料は高松市教育委員会が所蔵している資料（6コンテナ分）の一部について詳述する。

採集資料は今岡古墳上から箱形土製棺の身材や蓋材等の土製棺に関するもの、円筒埴輪の胴部や蓋形埴輪の飾り板等の埴輪類である。また、今岡古墳周辺から古式土師器の甕等の土器類や家形埴輪の鏝木等が採集されている。出土位置は遺物観察表に記載している。

77・78は割竹形土製棺の蓋部と推測される。77は外面に突帯を貼り付け内面はハケ調整する。78内面はハケ調整し、内面に突帯等を貼り付けた痕跡がみられる。

79・80は箱形土製棺の身材と推測される。79の外面に線刻や刺突が見られる。内面に補強に伴うものか粘土の貼り合わせが見られる。80は前方面南縁から採集されたものである。外面をハケ調整した後、突帯を貼り付ける。内面に補強に伴うものか粘土の貼り合わせが見られる。

81・82は箱形土製棺の身材である。81は外面と側面をハケ調整し、内面を指オサエで整える。外面から内面に向かって穿孔している。82は前方面南縁から採集されたものである。外面と側面をハケ調整し、内面を指オサエで整える。側面には線刻がみられる。

83～90は円筒埴輪である。その内、83は円筒埴輪の口縁部～胴部片で、84～90は胴部片、91・92は底部である。83は内外面をハケ調整する。透かしを穿孔する。84は内外面ハケ調整するが、突帯が剥がれている。85は外面をハケ調整し、内面をナデ調整する。86は内外面をハケ調整し、突帯を貼り付ける。88の突帯は粘土紐を巻き付けて重なった部分が残存している。突帯の貼り付けた部分に刺突状の痕跡があり、突帯を貼り付ける際の目印と推測される。89は外面をハケ調整し、突帯を貼り付ける。他の円筒埴輪の突帯に比べ、幅まみだした形状である。90は突帯の頂面を強いナデで整形している。91は内外面をハケ調整する。外面にガリ痕の可能性が高いが、線刻のような痕跡がみられる。透かしを穿孔する。92は内外面をハケ調整する。透かしを穿孔する。

93・94は朝顔形埴輪の頸基部である。形を成形した後に突帯を貼り付ける。94は内面をハケ調整する。95は朝顔形埴輪の基部と考えられる埴輪である。端面にはハケのような痕跡がみられる。2箇所接合面がみられる。

96・97は蓋形埴輪である。96は立ち飾り部の飾り板である。下部が直線的である。内外面をハケ調整した後文様を施文する。97は前方面南縁から採集された蓋部である。外面をハケ調整や指オサエで整形し、内面も上部や下部を中心にハケ調整し整形する。

98は家形埴輪の堅魚木である。中央を削り補足し、両端は肥厚し鼓状にする。

99は弥生土器の高杯である。内外面をヘラミダギ調整する。脚部に穿孔2箇所が確認できる。穿孔は配置の関係から計3箇所になると推測される。

100は前方面の土製棺出土地点付近で採集した古式土師器の甕である。外面をハケ調整し、内面をヘラケズりする。

101～104は今岡古墳やその周辺から採集された土器類である。101・102は古式土師器の甕の口縁部である。101は内外面をハケ調整する。103は須恵器の甕である。穿孔は外側から内側に向けて穿たれ、直径約1.1cmと考えられる。104は土師質土器の足金である。外面に格子叩きがみられる。

（香川）

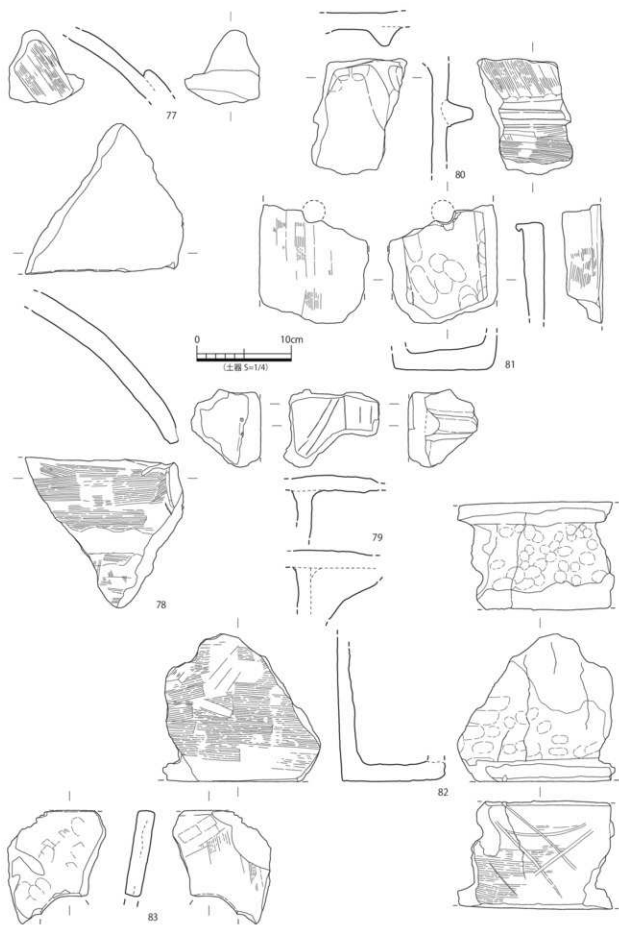


図13 今岡古墳関連採集資料① (S= 1 / 4)

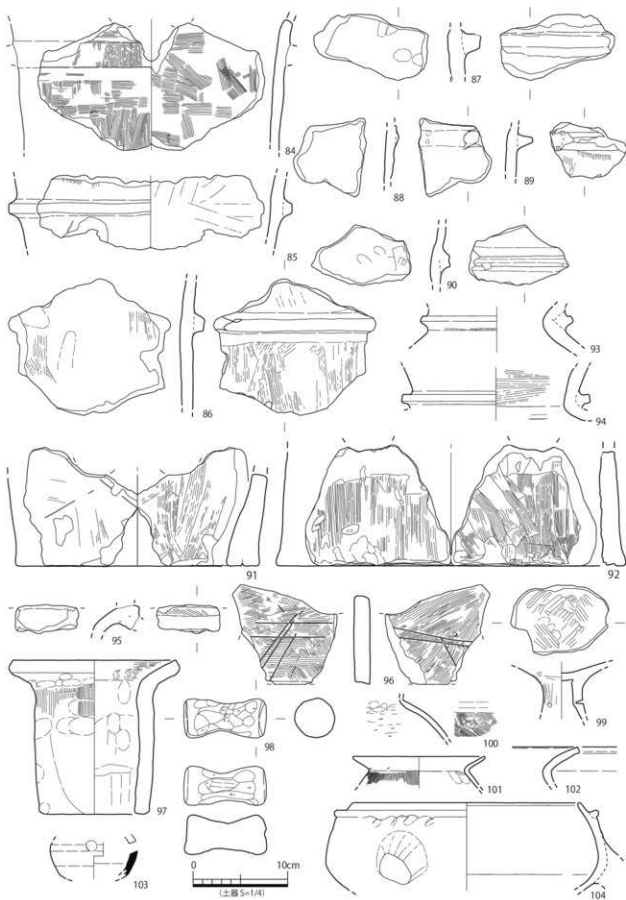


图 14 今岡古墳関連採集資料② (S= 1 / 4)

第5章 まとめ

今回の調査は6つのトレンチによる小規模な調査であったが、既述の成果とこれまでの知見を踏まえて、今岡古墳の規模と現在明らかになっている歴史的価値について整理しておきたい。

今回の調査を踏まえると、墳丘規模は後円部径約35m、前方部長35m、前方部端幅約29m、全長65.9mと考えられ、後円部高6m以上、前方部高3.4m以上となる。墳丘構造は、後円部が2段築成以上、前方部は2段築成であったと考えられる。墳丘表面は葺石で覆い、円筒埴輪を樹立し、これまでに採集された形象埴輪群からは後円部の墳頂は多量の器財形埴輪で飾り立てられたと考えられ、前方部での埋葬行為においては土製棺が使用されている。こうした葬送儀礼における道具立てから、それ以前の古墳とは異なる道具立てによる葬送儀礼の導入を物語る古墳と位置付けることができ、県内でも類をみない古墳と言える。

古墳の築造動向、埴輪の年代などにおけるこれまでの研究（蔵本 2015、大久保 2018、真鍋 2022 など）を踏まえると、築造自体が極めて限定的な古墳時代中期初頭に位置付けられ、この時期としては高松平野において最大規模の前方後円墳である。高松平野では積石で構築される石清尾山古墳群が古墳時代前期を通じて隆盛を誇るが、その衰退に連動するように、本津川を挟んだ新たな地に今岡古墳が築造される。加えて、巨視的な視点から見れば、古・高松湾を挟んで、屋島の長崎鼻古墳と対峙するような配置をなし、古墳の築造動向及びその立地からも、本県の古墳時代中期という新たな時代を象徴する古墳とも言える。

以上のように、今回の調査とこれまでの調査研究を踏まえると、今岡古墳の規模や県内における築造動向、最新の葬送儀礼を導入しているという点などから、本県の古墳時代を考える上で極めて重要な古墳であることを改めて認識することができる。

さて一方で、残された課題も少なくない。今岡古墳のもつ価値を鮮明にするためには、既述した課題である墳丘構造（段築、葺石などの状況）及び具体的な墳丘構築方法の解明も必要不可欠である。加えて、後円部の埋葬施設とその構造も不明で、時期や墳丘規模から埋葬主体に石棺が使用されている可能性も想定される（高橋 1958）。今回の調査成果を踏まえた、より戦略的かつ目的的な発掘調査の実施が必要となるであろう。

既に、蔵本氏によって報告されている多様で多彩な埴輪類（蔵本 2017）に加え、土製棺、装飾品、鏡などの出土遺物の総合的な研究が必要であることも言うまでもない。今後の課題としておきたい。

いづれにしても、ここでは、今岡古墳のもつ価値はまだ十分に掘り起こされていないことを明記して、今後の調査に繋げておきたい。（渡邊）

参考文献

- 今岡重夫 1974 『今岡古墳ノート』
大平要 1978 『今岡古墳出土の鏡について』『瀬戸内海歴史民俗だより』第5号
大久保徹也 1996 『第5章 まとめ 第4節 土製棺』『中間西井坪遺跡』1 香川県教育委員会
大久保徹也 2018 『石清尾山古墳群調査の意義 - 稲荷山北端古墳が示すこと -』『石清尾山古墳群国指定追加指定記念シンポジウム - 古墳群の未来へ提言する - 資料集』高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課
香川県香川郡上笠居村公民館 1952 『(1) 今岡古墳』『上笠居村史』
香川県埋蔵文化財委員会 1983 『今岡古墳』『新編香川叢書』考古編
香川県教育委員会 1996 『中間西井坪遺跡』1
香川県教育委員会 2021 『香川県文化財年報』令和元年度
香川県教育委員会 2021 『今岡古墳』『香川の文化財』
香川県教育会香川郡部会 1944 『今岡古墳』『讃岐香川郡誌』
香川県埋蔵文化財センター 2020 『4 香川県内遺跡発掘事業 今岡古墳』『香川県埋蔵文化財センター年報』平成30年度
香川県埋蔵文化財センター 2021 『5 香川県内遺跡発掘事業 今岡古墳』『香川県埋蔵文化財センター年報』令和元年度
鬼無町誌編集委員会 2007 『今岡古墳』『ふるさと鬼無』
蔵本晋司 1995 『香川県高松市三谷石舟古墳の再検討』『香川考古』第4号、香川考古刊行会
蔵本晋司 2004 『丸亀市吉岡神社古墳の再検討』『研究紀要33』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

- 蔵本晋司 2017 「四国における前半期古墳出土土壌輪の基礎的研究—香川県今岡古墳出土土壌輪を中心として—」『香川県埋蔵文化財センター年報』平成 27 年度
- 瀬戸内海歴史民俗資料館 1983 『讃岐青銅器図録』
- 高橋邦彦 1958 「銅鈴・古墳」『文化財協会報』特別号第 3 集 香川県文化財保護協会
- 高松市 2018 『石濱尾山古墳群国史跡追加指定記念シンポジウム資料集』
- 高松市教育委員会 2014 『佐料遺跡』
- 高松市教育委員会 2017 『相作馬塚古墳』2
- 高松市教育委員会 2019 『高松市内遺跡発掘調査概報』平成 30 年度国庫補助事業
- 高松市教育委員会 2021 『高松市内遺跡発掘調査概報』令和 2 年度国庫補助事業
- 墳輪検討会 2022 『墳輪の分類と編年』
- 福家惣衛 1921 「今岡古墳」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第 1
- 福家惣衛 1950 「今岡古墳」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第 14
- 真鍋貴臣 2022 「地域報告 6 香川県」『中期古墳研究の現状と課題』IV
- 丸亀市立資料館 2014 『讃岐の前期古墳版～快天山古墳の時代～』
- 六車恵一 1969 「今岡古墳」『日本考古学年報』第 17 号 日本考古学協会
- 森下浩行 1983 「高松市鬼無町今岡古墳とその組合式陶棺」『香川考古』創刊号
- 山元敏裕 1999 「今岡古墳」『香川県埋蔵文化財調査年報』平成 9 年度
- 渡部明夫 1976 「高松市鬼無町・今岡古墳採集の円筒墳輪」『文化財協会報』第 69 号 香川県文化財保護協会
- 渡部明夫 1993 「今岡古墳」『前方後円墳集成』中国・四国編

表2 遺物観察表①

遺物 番号	出土 遺構	出土・ 採取位置	種類	器種	部位	度量 (cm)			図様		色調		胎土	焼成	残存率	備考
						口径 長さ	底径 長さ	高さ 長さ	外周	内周	外周	内周				
1	1950-F	法正上2	磁器	香炉鉢	口縁部	-	-	1.83	F+F	F+F	7.595/6 褐色	5975/16 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
2	1950-F	法正上2	磁器	香炉鉢	口縁部	-	-	12.51	F+F	F+F	5976/16 褐色	5976/16 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
3	4950-F	法正上	磁器	香炉鉢	口縁部	-	-	12.83	F+F	F+F	2.5975/6 褐色	2.5975/6 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
4	5950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	口縁部	-	-	15.41	F+F	F+F	5975/16 褐色	5975/16 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
5	-	表土層裏	磁器	内瓦鉢	口縁部	-	-	13.83	F+F	F+F	5976/16C 褐色	5976/16 褐色	1-2cm程度の片石等 少量混入	■	破片	
6	-	表土層裏	磁器	内瓦鉢	口縁部	-	-	13.51	F+F	F+F	5976/16 褐色	7.5976/6 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
7	1950-F	法正上2	磁器	内瓦鉢	口縁部	-	-	12.43	F+F	F+F	5976/16 褐色	5976/16 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
8	1950-F	法正上2	磁器	内瓦鉢	口縁部	-	-	14.83	F+F	F+F	5976/16 褐色	5976/16 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
9	4950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	口縁部	-	-	14.63	F+F	F+F	5976/16 褐色	5976/16 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
10	1950-F 表土層裏	法正上	磁器	内瓦鉢	口縁部	-	-	13.23	F+F	F+F	10976/16C 褐色	10976/16C 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
11	-	粘土	磁器	内瓦鉢	口縁部	-	-	11.63	F+F	F+F	2.5975/16 褐色	2.5975/16 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
12	4950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	口縁部	-	-	14.83	F+F	F+F	5976/16 褐色	5976/16 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
13	1950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	口縁部	-	-	15.63	F+F	F+F	5975/16C 褐色	5975/16C 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
14	1950-F	法正上2	磁器	内瓦鉢	口縁部	-	-	12.03	F+F	F+F	5976/16 褐色	5976/16 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
15	1950-F	表土層裏	磁器	内瓦鉢	口縁部	-	-	13.53	F+F	F+F	5975/16 褐色	5975/16 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
16	5950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	口縁部	-	-	13.23	F+F	F+F	2.5975/6 褐色	2.5975/6 褐色	1-3cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
17	1950-F	粘土	磁器	内瓦鉢	口縁部	(25.6)	-	110.03	F+F+V, F+F	破片F, F+F	7.5976/16 褐色	5975/16 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	1/3	
18	-	表土層裏	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	13.83	F+F+V, 破片F	F+F+F	5976/16 褐色	5976/16 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
19	-	粘土	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	12.63	F+F	F+F	7.5976/6 褐色	2.5975/6 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
20	5950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	14.63	破片F	F+F	7.5977/16 褐色	2.5975/6 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
21	5950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	14.23	F+F	F+F	5976/16C 褐色	5976/16 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
22	5950-F	焼丸	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	12.23	F+F	F+F	2.5975/6 褐色	2.5975/6 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
23	1950-F	表土層裏	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	13.03	F+F	F+F	10976/25 褐色	5975/16 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
24	5950-F	焼丸	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	13.23	F+F	F+F	10976/25 褐色	10976/25 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
25	-	表土層裏	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	15.03	F+F+V, 破片F	F+F	5976/16C 褐色	5976/16C 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
26	4950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	16.03	F+F	F+F	11976/16 褐色	5976/16 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
27	5950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	15.63	破片F	F+F	5975/16 褐色	7.5976/6 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
28	-	表土層裏	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	16.03	F+F+V, 破片F	破片F	2.5975/6 褐色	2.5976/6 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
29	5950-F	焼丸	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	110.23	F+F	F+F	5976/16 褐色	5975/16 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
30	5950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	14.83	破片F+V, 破片F	F+F	7.5976/16 褐色	2.5975/6 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
31	5950-F	焼丸	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	15.83	破片F+V, 破片F	破片F+V, 破片F	7.5976/16 褐色	2.5976/6 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	内装カスリ
32	5950-F	焼丸	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	17.83	破片F	F+F	5976/16 褐色	2.5975/6 褐色	1-3cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
33	5950-F	焼丸	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	12.23	破片F	F+F	2.5975/6 褐色	2.5975/6 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
34	4950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	17.43	F+F+V, 破片F	破片F, 破片F	2.5975/6 褐色	2.5976/6 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
35	1950-F	法正上2	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	16.43	破片F	破片F	7.5976/16 褐色	5975/16 褐色	1-2cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
36	5950-F	焼丸	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	13.63	F+F破	F+F破	7.5976/6 褐色	5975/16 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	カスリ
37	4950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	13.63	破片F	F+F	2.5975/6 褐色	2.5975/6 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
38	5950-F	焼丸	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	15.83	F+F破	F+F破	5975/16 褐色	5975/16 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	土装カスリ
39	2950-F	第三層法土中	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	15.63	破片F, 破片F	破片F	5975/16 褐色	5975/16 褐色	2cm以下の片石・石 灰	■	破片	
40	1950-F 表土層裏	法正上	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	15.83	破片F+V, 破片F	F+F	7.5976/16 褐色	2.5975/6 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	内装カスリ
41	4950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	14.83	破片F	F+F	5975/16C 褐色	5975/16C 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
42	5950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	15.43	F+F+破, F+F+破	F+F+破	5975/16 褐色	5975/16 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
43	-	表土層裏	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	15.43	F+F	F+F+破	5976/16 褐色	5976/16 褐色	1-2cm片石・石灰 中量混入	■	破片	
44	5950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	14.83	F+F	F+F	5976/16 褐色	5976/16 褐色	1-3cm程度の片石・石 灰中量混入	■	破片	
45	4950-F	法正上	磁器	内瓦鉢	笠	-	-	13.83	破片F	F+F	10977/32 褐色	10977/32 褐色	1-5cm片石・石灰 中量混入	■	破片	

表3 遺物観察表②

遺物 番号	出土 遺構	出土・ 採取位置	種類	器種	部位	流量 (cm)			調整		色調		胎土	焼成	残存率	備考
						口径 長さ	底径 長さ	器高 厚さ	外面	内面	外面	内面				
46	46-1	近江部東側土	埴輪	内見埴輪	胴部	-	-	(2.8)	斜付突縁、ナズ	摩滅	2.5YR5/6 褐色	5YR5/6 褐色	3cm以下の赤褐色-黒色 帯	是	破片	
47	-	赤倉遺構	埴輪	内見埴輪	突縁	-	-	(5.0)	ナズ	ナズ	5YR5/6 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
48	-	赤倉遺構	埴輪	内見埴輪	突縁	-	-	(6.0)	ナズ	2.2ナズ	5YR5/4 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
49	13-1	壇丸	埴輪	内見埴輪	突縁	-	-	(9.0)	3.2ナズ	ナズ	10YR5/4 赤褐色	2.5YR5/6 褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
50	徳富部南 宮	赤倉遺構	埴輪	内見埴輪	突縁	-	-	(5.8)	ナズ	ナズ	5YR5/6 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
51	46-1	赤倉土	埴輪	内見埴輪	突縁	-	-	(2.8)	ナズ	ナズ	7.5YR5/4 赤褐色	2.5YR5/6 褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
52	46-1	赤倉土	埴輪	内見埴輪	突縁	-	-	(4.4)	ナズ	ナズ、胎縁直縁	7.5YR7/4 赤褐色	2.5YR5/6 褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
53	53-1	赤倉土	埴輪	内見埴輪	突縁	-	-	(2.8)	ナズ	ナズ	7.5YR5/4 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
54	53-1	赤倉土	埴輪	内見埴輪	突縁	-	-	(4.4)	ナズ	ナズ、ナズ	5YR5/6 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
55	46-1	赤倉土	埴輪	内見埴輪	突縁	-	-	(2.0)	ナズ	ナズ	2.5YR5/6 赤褐色	-	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
56	-	赤倉遺構	埴輪	内見埴輪	突縁	-	-	(3.0)	ナズ	ナズ	7.5YR5/4 赤褐色	2.5YR5/6 褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
57	46-1	赤倉土	埴輪	内見埴輪	胴部	-	-	(1.4)	ナズ	ナズ	5YR5/6 赤褐色	-	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
58	53-1	赤倉土	埴輪	内見埴輪	胴部	-	-	(7.8)	ナズ	ナズ	5YR5/5 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	胎縁欠片
59	53-1	壇丸	埴輪	内見埴輪	胴部	-	-	(6.4)	ナズ	ナズ	10YR7/4 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	破片
60	13-1	赤倉遺構	埴輪	内見埴輪	胴部	-	-	(9.4)	ナズ、ナズ	ナズ、ナズ	7.5YR5/4 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	胎縁欠片は土質異質 破片
61	13-1	赤倉遺構	埴輪	内見埴輪	胴部	-	-	(6.4)	ナズ	ナズ	7.5YR5/4 赤褐色	7.5YR5/6 褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
62	46-1	赤倉土	埴輪	内見埴輪	胴部	-	-	(7.4)	ナズ	ナズ	5YR5/3 赤褐色	2.5YR5/6 褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
63	近江部東 側	赤倉遺構	埴輪	内見埴輪	胴部	-	-	(3.4)	ナズ	ナズ	5YR5/6 赤褐色	7.5YR5/6 褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
64	46-1	赤倉土	埴輪	内見埴輪	胴部	-	-	(5.2)	ナズ	ナズ	5YR5/6 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
65	46-1	赤倉土	埴輪	内見埴輪	胴部	(2X.4)	-	(4.2)	ナズ	ナズ	5YR5/6 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
66	-	赤倉遺構	埴輪	蓋形埴輪	凸縁	-	-	(4.2)	ナズ	ナズ	7.5YR5/6 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	破片
67	-	赤倉遺構	埴輪	蓋形埴輪	凸縁	-	-	(4.8)	ナズ	ナズ	5YR5/6 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	破片
68	46-1	赤倉土	埴輪	蓋形埴輪	凸縁	-	-	(4.2)	ナズ	ナズ	2.5YR5/6 褐色	10YR5/6 褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
69	-	赤倉遺構	埴輪	蓋形埴輪	凸縁	-	-	(5.2)	ナズ	ナズ、ナズ	7.5YR5/4 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
70	-	赤倉遺構	埴輪	平埴	-	-	-	(3.2)	ナズ	ナズ	5YR5/6 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	破片
71	46-1	赤倉土	埴輪	平埴	-	-	-	(2.4)	ナズ、ナズ	ナズ	5YR5/6 赤褐色	-	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
72	近江部東 側	赤倉遺構	土製器	蓋	-	-	-	(1.4)	ナズ、ナズ	ナズ、ナズ	5YR5/6 赤褐色	7.5YR5/6 褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
73	46-1	赤倉土	土製器	支持部材	-	-	-	(14.2)	ナズ	ナズ	5YR5/6 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	胎縁欠片
74	46-1	赤倉土	土製器	支持部材	-	-	-	(6.0)	ナズ	ナズ	2.5YR5/6 褐色	2.5YR5/6 褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
75	53-1	壇丸	土製器	支持部材	-	-	-	(6.0)	ナズ	ナズ	2.5YR5/6 褐色	2.5YR5/6 褐色	1~2cmの赤褐色-黒褐色 中層帯	是	破片	
76	13-1	赤倉遺構	土製器 土器	支持部材 蓋部	口縁部	-	-	(1.0)	ナズ	ナズ	2.5YR5/1 褐色	6A/褐色	2cmの赤褐色ナズ 帯	是	破片	
77	-	平埴	土製器	瓶形	蓋部	-	-	(7.5)	胎縁突縁、摩滅	ナズ	5YR5/6 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	4cm以下の赤褐色-黒色 帯 2cm以下の赤褐色帯	是	破片	
78	-	平埴	土製器	瓶形	蓋部?	-	-	(16.0)	ナズ、摩滅	ナズ	7.5YR5/6 褐色	7.5YR5/6 褐色	3cm以下の赤褐色-黒褐色 帯 胎縁欠片	是	1.5未満	
79	-	平埴	土製器	瓶形	胎縁?	-	-	(7.3)	摩滅	ナズ、胎縁ナズ	5YR5/6 赤褐色	7.5YR5/6 褐色	2cm以下の赤褐色-黒褐色 帯 胎縁欠片	是	破片	破片
80	-	近江部東側	土製器	瓶形	胎縁?	-	-	(4.9)	ナズ、胎縁ナズ、ナズ	胎縁ナズ	5YR5/6 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	4cm以下の赤褐色-黒色 帯 2cm以下の赤褐色帯	是	破片	
81	-	近江部東側	土製器	瓶形	胎縁?	-	-	(4.3)	ナズ、ナズ	胎縁ナズ	5YR5/6 赤褐色	7.5YR5/6 褐色	4cm以下の赤褐色-黒褐色 帯	是	破片	
82	-	近江部東側	土製器	瓶形	胎縁?	-	-	(15.4)	ナズ、ナズ	胎縁ナズ	5YR5/6 赤褐色	5YR5/3 赤褐色	3cm以下の赤褐色-黒褐色 帯 胎縁欠片	是	破片	破片
83	-	赤倉	埴輪	内見埴輪	胎縁口縁部	-	-	(12.0)	ナズ、ナズ、摩滅	ナズ、胎縁直縁	7.5YR5/4 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	A.5cm以下の赤褐色-黒褐色 帯 胎縁欠片	是	1.5未満	胎縁欠片、内面欠片
84	-	平埴	埴輪	内見埴輪	胎縁	(2X.8)	-	(1.3)	ナズ、ナズ	ナズ	5YR5/6 赤褐色	7.5YR5/6 褐色	5cm以下の赤褐色-黒褐色 帯	是	1.5未満	
85	-	平埴	埴輪	内見埴輪	胎縁	-	-	(7.7)	ナズ、ナズ、胎縁突縁、胎縁?	胎縁ナズ、ナズ	5YR5/6 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	3cm以下の赤褐色-黒褐色 帯	是	1.5未満	
86	-	平埴	埴輪	内見埴輪	胎縁	-	-	(14.4)	ナズ、ナズ	ナズ、ナズ	2.5Y7/3 褐色	2.5Y7/3 褐色	3cm以下の赤褐色-黒褐色 帯	是	1.5未満	
87	-	赤倉	埴輪	内見埴輪	胎縁	-	-	(5.4)	ナズ、胎縁直縁、胎縁突縁	ナズ	7YR5/6 赤褐色	5YR5/6 赤褐色	A.5cm以下の赤褐色-黒褐色 帯	是	1.5未満	胎縁欠片?

表4 遺物観察表③

遺物番号	出土環境	出土・採取位置	種類	器種	部位	寸法 (mm)			調製		色調		胎土	焼成	残存率	備考
						口径長さ	底径幅	高さ厚さ	外側	内側	外側	内側				
88	平焼	埴輪	円筒埴輪	胴部	-	-	[8.3]	摩滅した状態で、次第の断面が見える	摩滅	7.5YR5/1 11.0Y・橙赤	7.5YR5/1 暗褐色	4mm以下の赤黒・赤石	赤	1/3未満	原形(鎌倉遺物)の一部 和歌山県) 淡路島出土の 粘土質で、断面が口縁 部で割断	
89	平焼	埴輪	円筒埴輪	胴部	-	-	[8.3]	ナリ、ナリ	摩滅	7.5YR6/4 11.0Y・橙赤	5YR5/10 赤褐色	3mm以下の赤黒・赤石 褐色粒、赤色粒・赤黄 褐色粒	赤	1/3未満		
90	灰焼	埴輪	円筒埴輪	胴部	-	-	[8.0]	ナリ、断面平滑、ナ リ	ナリ、断面平滑	7.5YR6/4 11.0Y・橙赤	5YR6/10 赤褐色	2.5mm以下の赤黒・赤 石、赤色粒、黄褐色 褐色粒	赤	1/3未満	鎌倉遺物	
91	平焼	埴輪	円筒埴輪	底面	-	[25.6]	[12.05]	ナリ、ナリ	ナリ	5YR6/10 赤褐色	5YR5/10 赤褐色	4mm以下の赤黒・赤石 赤色粒、赤色粒・赤黄 褐色粒	赤	1/3	鎌倉? 月形土器?	
92	平焼	埴輪	円筒埴輪	底面	-	[36.4]	-	ナリ、ナリ	ナリ、ナリ	5YR5/10 赤褐色	5YR5/10 赤褐色	5mm以下の赤黒・赤石	赤	1/3	月形土器?	
93	平焼	埴輪	断面円筒 埴輪	断面部	-	-	[8.3]	断面平滑、縁部残 存ナリ	摩滅	7.5YR6/4 11.0Y・橙赤	5YR5/10 赤褐色	7mm以下の赤黒・赤黄 褐色粒、赤褐色粒、1mm以下の 黄褐色褐色粒	赤	1/3		
94	平焼	埴輪	断面円筒 埴輪	断面部	-	-	[8.4]	3.2ナリ	ナリ、ナリ、断面ナリ	5YR5/10 赤褐色	5YR5/10 赤褐色	2mm以下の赤黒・赤石 赤色粒、褐色褐色粒	赤	1/3		
95	灰焼	埴輪	断面円筒 埴輪?	断面?	-	-	[2.8]	ナリ、断面平滑、ナ リ?	摩滅	5YR5/10 11.0Y・橙赤	5YR5/10 赤褐色	3mm以下の赤黒・赤石 赤色粒、褐色褐色粒	赤	1/3未満	鎌倉遺物	
96	平焼	埴輪	断面円筒 埴輪	断面	[10.5]	[1.1]	1.7	ナリ、断面	ナリ、断面	5YR5/10 赤褐色	5YR5/10 赤褐色	3mm以下の赤黒・赤石	赤	鎌倉?		
97	灰土質赤褐色焼付灰	埴輪	断面円筒 埴輪	断面	[17.2]	[10.8]	16.2	ナリ、断面ナリ	ナリ、断面ナリ	2.5YR6/1 赤褐色	2.5YR6/1 赤褐色	4mm以下の赤黒・赤石	赤	2/3		
98	平焼	埴輪	断面円筒 埴輪	断面部	-	-	[6.2]	ナリ、断面ナリ、ナ リ	ナリ	2.5YR7/3 黄褐色	-	1mm以下の赤黒・赤石 赤石	赤	鎌倉?		
99	灰焼	埴輪土器	断面	断面一部	-	-	[6.0]	ナリ、断面	ナリ、断面 断面平滑、ナリ、 断面平滑	7.5YR6/4 11.0Y・橙赤	7.5YR6/4 11.0Y・橙赤	1mm以下の赤石・黄褐色 赤石	赤	2/3	鎌倉? 月形土器? 断面 ナリ	
100	灰土質赤褐色焼付灰	赤褐色土器	蓋	断面	-	-	[3.2]	ナリ、ナリ	ナリ、断面ナリ	5YR5/10 赤褐色	10YR7/6 黄褐色	2mm以下の赤黒・赤石 1mm以下の赤色粒赤石	赤	1/3未満		
101	中間古銅色焼成	赤褐色土器	蓋	口縁	[14.0]	-	[3.4]	ナリ、ナリ	ナリ、ナリ	10YR7/6 11.0Y・黄褐色	10YR7/6 黄褐色	3mm以下の赤黒・赤石 赤石	赤	2/3		
102	中間古銅色焼成	赤褐色土器	蓋	口縁	-	-	[4]	ナリ	摩滅	10YR7/6 11.0Y・黄褐色	10YR7/6 黄褐色	3mm以下の赤黒・赤石 赤石	赤	1/3未満		
103	中間古銅色焼成	赤褐色土器	蓋	断面	-	-	[3.8]	断面ナリ、断面ナ リ	断面ナリ	5Y6/1 11.0Y・赤褐色	4Y7/1 赤褐色	1mm以下の赤黒・赤石 赤褐色粒	赤	1/3		
104	灰焼	赤褐色土器	断面	断面一部 断面	[23.6]	-	[9.25]	断面ナリ、ナリ、断 面ナリ、断面平滑、断面 平滑、断面平滑	ナリ、断面	10YR7/3 11.0Y・黄褐色	2.5YR6/1 赤褐色	3mm以下の赤黒・赤石 赤色粒赤石	赤	1/3		

写 真 图 版



1. 1トレンチ調査前状況（西から）



2. 1トレンチ土層及び円礫出土状況（南東から）



3. 1トレンチ完掘状況（東から）



1. 2トレンチ調査前状況（東から）



2. 2トレンチ設置状況（北から）



3. 2トレンチ流土検出状況（北から）



1. 2トレンチ完掘状況（北から）



2. 2トレンチ完掘状況（北東から）



3. 2トレンチ掘検出状況（北から）



1. 3トレンチ調査前状況（東から）



2. 3トレンチ土層（前方部盛土）
（南東から）



3. 3トレンチ完掘状況（西から）



1. 4トレンチ調査前状況（東から）



2. 4トレンチ土層（前方部盛土）
（北西から）



3. 4トレンチ埴輪出土状況（北から）



1. 4トレンチ完掘状況（西から）



2. 3・4トレンチ完掘状況（南東から）



3. 5トレンチ掘出土状況（西から）



1. 5トレンチ完掘状況（西から）



2. 5トレンチ完掘状況（北東から）



3. 6トレンチ調査前状況（南東から）



1. 6トレンチ完掘状況（南東から）



2. 6トレンチ中央平面
検出状況（西から）



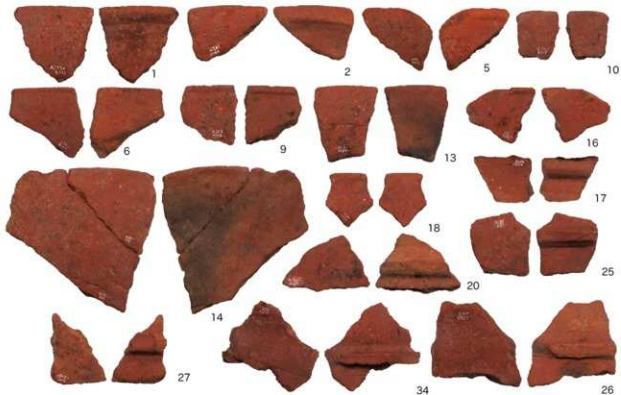
3. 6トレンチ盛土検出状況（西から）



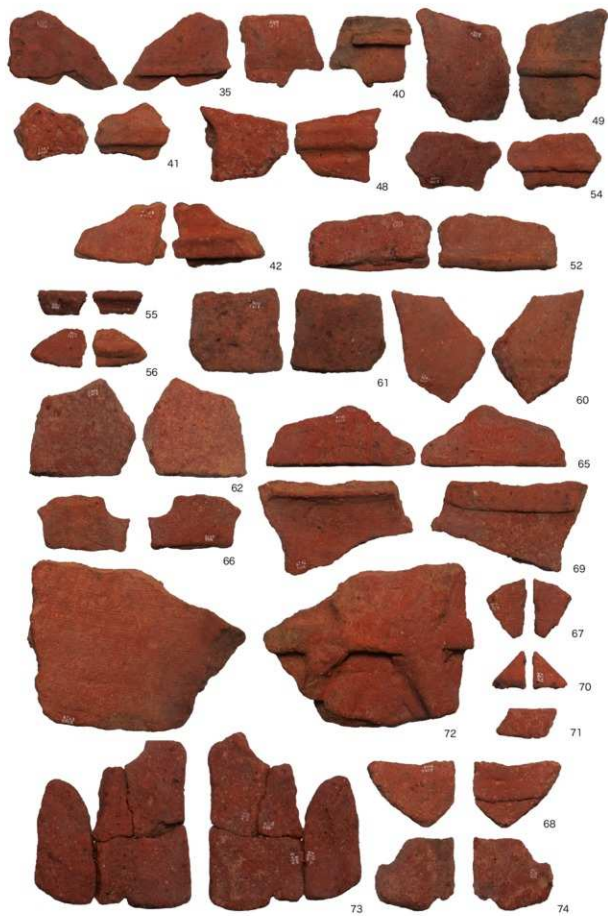
1. 6トレンチ推定盛土検出状況（南西から）



2. 6トレンチ埴輪出土状況（南西から）



3. 調査出土埴輪①



1. 調査出土埴輪②

報告書抄録

ふりがな	いまおひこふん							
書名	今岡古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第251集							
編著者名	香川将慶・波多野篤・真鍋貴匡・渡邊 誠							
編集機関	高松市教育委員会・香川県教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	令和6年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査 面積	発掘 原因
		市町村	遺跡番号					
いまおひこふん 今岡古墳	いまおひこふん 香川県 たかまつし 高松市 きなしちよう 鬼無町	37201	10060	34° 19′ 51″	133° 59′ 19″	2018. 3. 12～19 2019. 3. 12～22 2020. 3. 09～25	56㎡	内容確認
所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
今岡古墳	古墳	古墳	古墳 (墳丘)	埴輪 土製棺		県指定史跡		
要約	今岡古墳は古墳時代中期初頭の前方後円墳である。今回の調査では、古墳の主軸方向の墳端を確認し、墳丘規模が明確になった。墳丘構造では、段築に伴うテラス面を確認し、前方部では盛土によって構築されていることが確認された。今回の発掘調査によって、高松平野のみならず、香川県における古墳時代中期を考える上で重要な古墳であることが再認識された。							

2024年3月31日 発行

高松市埋蔵文化財調査報告第251集

今 岡 古 墳

著作権所有 高松市番町一丁目8番15号
発行者 高松市教育委員会
香川県教育委員会
印刷者 有限会社中央ファイリング